

表紙から



子どもたちが笑顔になる人形劇

今月の表紙は、札幌大谷短期大学人形劇サークル「コロポックル」(部長 小林歩さん)です。

「コロポックル」は、保育科の学生が中心となって結成したサークルです。現在は、子どもと触れ合いたくて入部したという十二人のメンバーで活動しています。学校祭などで公演するほかにも、依頼があれば授業や試験の合間をぬって、可能な限り子どもたちに人形劇を見せているそうです。昨年度は、市内の保育園や児童会館などで十回ほど公演を行いました。

「コロポックル」の人形劇は、

縫いぐるみの人形から道具具まですべて手作りです。脚本も絵本などを基にして自分たちで作り、公演のときには舞台装置や人形操作、音響など、一人が何役もこなします。

「全員で劇を作り上げるので、公演が

「コミュニティマーケットin東区」での公演「十二支からはずれたねこ」(3/8)

終わったときには大きな達成感があります」と皆さんは話します。人形劇を通じて、力を合わせて一つのことをやり遂げることの素晴らしさを知ったそうです。

仲が良く、練習中は笑い声の絶えない皆さんですが、本番になると一変して真剣な表情に。公演では人形の声役の人が脚本を読み上げ、そのせりふに合わせて別の人形を操作します。両者の息がぴったりと合って初めて、人形はまるで生きていくかのように動き始めます。

以前「三匹の子ブタ」を演じたとき、オオカミが子ブタを食べてしまう場面で、オオカミのあまりの迫力に子どもが泣き出したこともありました。「そこまで劇に引き込まれていたのかと思うとうれしい」と話す皆さん。人形劇を見た子どもたちの笑顔が一番の喜びだそうです。これからも、夢のある舞台を子どもたちに見せ続けてくれることでしょう。



三月には、東区民センターで行われた「コミュニティマーケットin東区」に参加して、多くの市民団体や子どもたちと交流しました。皆さんもどこかで「コロポックル」と出会えるかも知れませんね。

ひがすとりー

第25回

村は家畜とともに
牛と歩む日々(四)

牛乳を練乳会社に出荷する

大正になると、札幌村では牛乳の生産量を増すため、従来からのエアシャー種に替えて、ホルスタイン種を導入します。大正末期、牛の頭数は七百四十六頭、牛乳生産量は約百万リットル、牛乳販売額は十万七千六百三十二円を記録しています。早朝、牛乳を出荷する馬車が苗穂の北海道煉乳株式会社に向かう光景がよく見られました。

酪産を設立する

第一次世界大戦後の不況と練乳の輸入急増。そんな情勢の中、宇都宮仙太郎は、酪農家が安定した収入を得られるように、乳製品を製造販売する組合の設立を目指します。宇都宮は、黒沢西蔵、佐藤善七と協力し、酪農家の組織化を図るために奔走しました。

道内各地の酪農家は宇都宮らの意向に賛同して出資。一九二五(大正十四)年、北海道製酪販売組合が誕生し、宇都宮が組合長に就任します。設立後直ちに白石村の仮工場での製造に着手。この組合が今の雪印乳業の前身です。



酪産の工場(大正15年)

翌年、北海道製酪販売組合連合会(酪産)に改組し、商標も雪印に決定。同年十二月、苗穂に事務所と工場を新設します。落成式で役員は手を取り合っており、喜んだそうです。工場は東洋一の設備であると称賛されました。後に雪印の主力製品となるアイスクリームとチーズもこの工場で作られます。一九三二(昭和七)年、酪産は、道産牛乳を原料とするすべての大手乳業会社と協定を結び、牛乳の購入と販路確保の責任を生産者に対して負うことになりました。酪産は、道内酪農家の組織化を進め、酪農業の発展を促したのです。

さとらんのミルクの郷

平成八年、サツラク農業協同組合がさとらんにミルクの郷を完成させました。ここには牛舎や最新の設備を誇る牛乳工場などがあり、夏季に市民がたくさん訪れます。同組合の前身は明治に設立された札幌牛乳搾取業組合です。ミルクの郷は先人の業績を受け継ぎ酪農業の歴史を切り開いています。